

正直と儉約

～ 梅岩を実践する ～

石門心学実践講座 主催 竹花利明

はじめに

石田梅岩の教えを単なる教養として学ぶのではなく、「**どうしたら、人生とビジネスに実践できるのか**」。
本書では、梅岩と石門心学を簡単に紹介したうえで、その中核となる思想と実践法を簡素にお伝えします。

なお、ご興味があれば、より深く梅岩の思想を探究した以下の2書をお読みいただければ幸いです。

「石田梅岩と孟子の性善」(<https://yaokikai.com/baigan/seizen.pdf>)

「本心と良心」(<https://yaokikai.com/baigan/honsin.pdf>)

石田梅岩と石門心学

- ・ 1685年10月12日に現在の京都府亀岡市にて、農家の次男として生まれる。(江戸時代中期)
- ・ 1695年11歳で京都の商家に丁稚奉公するが、商家没落のため15歳で故郷へ戻る。
- ・ 1707年23歳で京都の黒柳家に再び奉公する。20年間働き、番頭に出世する(商業を実体験)。働きながら「人の道」を希求し、「たとえ辻立てして鈴を振りながらでも道を説きたい」と誓う。
- ・
- ・ 1727年43歳で退職し、小栗了雲門下にて修行、開悟する。
- ・ 1729年45歳。自宅に無料の講席を開講する。
- ・ 1739年54歳。10年分の講義や月次会の問答をまとめ、「都鄙問答」を刊行する。
- ・ 1744年59歳。「儉約齊家論」を刊行する。
- ・ 1744年10月29日没、享年60歳。生涯独身、机以外の遺産なし。
- ・
- ・ 最盛期の門人は400名。手島堵庵、布施松翁、柴田鳩翁など優れた人材を輩出する。
- ・ 死後その教えは、「石門心学」として日本全国に広まり、心学舎は全国182か所に及ぶ。
- ・ 武士階級にも広まり、51藩・64名に及ぶ。
- ・ 2025年梅岩生誕340年、生誕地に「石田梅岩記念館」が開館

山本七平の説く、石田梅岩

- ・ 「日本資本主義の精神」「勤勉の哲学」の2冊で以下のように紹介されています。
日本人が働き者であり、同時に儉約・貯蓄したのは、石田梅岩の思想と石門心学の広がりによる。
正直・儉約・勤勉から日本の資本主義は生まれ、明治維新と戦後復興のための底力となった。

梅岩学の中核

- 梅岩は、以下の言葉にあるように、一般的には「**商人道の開祖**」と言われています。
 - まことの商人は、先も立ち、我も立つことを思うなり
 - 商人は勘定くわしくして、一銭軽しと云うべきに非ず
 - 物を売ること利を得るのは、商人の道である
 - これ（利益）をかさねて富をなすは商人の道なり
 - 富の主は、天下の人々なり
 - 二重の利を取り、甘き毒を喰ひ自死するやうなこと多かるべし
 - 商人で道知らない者は、貪ることだけを勉めて家を滅ぼす
- しかし・・・
都鄙問答にて「農民の道、武士の道、医師の道」を語り
儉約齐家論では「四民（士農工商）の道は共通している」と述べています。
実際には、梅岩は**商人に限ることなく「人の道」**を説いてきました。
- 道とは「**正しい生き方**」のこと。
結論として、梅岩の説く正しい生き方（道）とは、「**正直・儉約を实践する**」ことです。
ただし、一般的にいう「正直・儉約」とはその意味がが大きく異なっています。

梅岩の正直

- 一般的な定義
正直：正しくて、うそや偽りのないこと。
- 「梅岩の正直」とは、「**惻隱の心**」をそのままに行うこと。
 - 惻隱の心、発する所を直ちに行うを正直という
 - この正直行われるれば、世間一同に和合し、四海の中 皆兄弟の如し
- 惻隱とは、「**孟子の性善説**」の中核を成す概念です。
幼子が井戸に落ちようとするれば、悪人でもこれを助けようとする心。
孟子「全ての人には、惻隱・羞惡・辞讓・是非の4つの心がある」
孟子「惻隱の心は**仁**なり、羞惡の心は**義**なり、恭敬の心は**礼**なり、是非の心は**智**なり。」

仁義礼智とは・・・
仁：人助けをしたい、地域・社会・世界に貢献したい。「惻隱の心」
義：不正や悪を赦さない。「羞惡の心」
礼：人間関係を大切にしたい。「辞讓・恭敬の心」
智：あらゆる物事の善悪を正しく判断する「是非の心」（知識や知恵が必要）
- 梅岩は、これを「**仁義礼智の良心**」と呼んでいます。
「万民にある仁義礼智の良心が、人間の本質（性）であり、善である」というのが、孟子の性善説です。
- 「惻隱の心をそのままに行うこと」を言い替えば、
正直とは、「**良心のままに生きること**」「良心に従って生きること」。
- 自分が悪いことをすれば、即座に「**義**」の心が動き、心を苦しめます。（**良心の呵責**）
- 自分が善いことをすれば、即座に「**仁**」の心が動き、心を安楽にします。
良心のままに生きれば、心の安楽（＝本当の幸せ）を得ることができると、梅岩は教えています。
- 他人を助け、地域・社会・世界に貢献することなしに、人は真の幸福感を得ることはできない。
それは、**良心の作用**ゆえなのです。
- 梅岩の正直には、「**善なる嘘**」が存在しています。
例えば、幼い子供がサンタクロースを信じているなら、これを否定する必要はありません。
嘘をつくことが相手を喜ばせるならば、良心は「正しく、善である」と判断するのです。

梅岩の儉約

- 一般的な定義
儉約：出費をできるだけ減らし、浪費しないこと。(節約と同じ意味)
- 「梅岩の儉約」とは、**正直の実践**であり、同時に実践するための**土台**となります。
- 孟子は「**恒産なくして、恒心なし**」と言われています。
その意味は、「凡人は、一定の収入や財産（**恒産**）がないと、**道德心（恒心）**を保つことができない。」
日々の生活が安定し、**金銭に心配がない**状態であってこそ、良心に従うことができます。
日常生活ができないほどに金銭に困れば、人助けどころか、良心に反して悪を成すかもしれません。
- 儉約の功績は、収入が多くない場合でも、**恒産あり**の状態に保てることです。
収入が多くして、儉約すれば、貯めた金銭で**人を助ける**こともできます。
- 梅岩は、儉約に関して以下のように述べています。
 - 儉約を言うは他の儀にあらず、**生まれながらの正直**に還したき為なり
 - 我言う所は正直より為す儉約なれば、**人を助くるに至る**
 - **世界のために**、三つ必要なものを二つで済ませるようにすることを儉約という
 - 自分のために物惜しみするのは**欲心**であって儉約ではない。儉約とは**天下のために**するもの。
 - 儉約は**財宝を程よく用い**、我分限に応じ、過不及なく（使うこと）
- 儉約の目的は、正直になること、人を助けること、社会や世界に貢献すること。
ボランティアなど、お金がなくてもできることも数多くあります。
- 儉約とは、自分の分限（財産の状況）に応じて、**金銭を程よく使う**こと。
無理に節約することではありません。
- 梅岩の商人道とは、「**正当な商売**で利益を得て、一円の金銭も大切に**して積み重ね、富み栄える**」こと。
しかし、「**富の主は天下の人々**」なので、社会のために活用する。これが商人道における「儉約」です。
 - まことの商人は、先も立ち、我も立つことを思うなり
 - 商人は勘定くわしくして、一銭軽しと云うべきに非ず
 - これ（利益）をかさねて富をなすは商人の道なり
 - 富の主は、天下の人々なり
- **正直と儉約を実践すること**。良心に生きること。
これが梅岩の説く「人の道」です。

梅岩の実践

儉約 : 便所がなければ田畑で用を足し、糞尿を五穀を育てる肥料とした。

儉約 : 紙くずも大切にす。散らかってれば汚く見えるが、集めておけば再び紙になる。

儉約 : 一日二食。食べない一食が世の助けになる。

儉約 : 自分の説く道を一人でも理解する人がいるなら、一食を抜く小さな節約よりも遥かに大きい。

仁 : 45歳で自宅に無料の講席を設ける。(退職金+コツコツ貯めた給金で自炊生活をしながら)

仁 : 多くの弟子を育て、人の道を流布するために生涯を捧げる。

竹花の実践

儉約 : プラスソフトの26年を通じて、売上ゼロでも5年間生き残れる資本を形成。

仁 : 八起会にて、無料の月例会を続ける。倒産相談に無料に対応。

仁 : 不倒会にて、無料の経営勉強会を毎月5会。参加者は合計20名程度。

仁 : フェイスブックにて、石田梅岩と一倉定(3000名以上)グループを運営し、毎日投稿。

義 : 不法外国人問題(偽装難民・犯罪や迷惑行為)、捕鯨問題(全人類の年間漁獲量の3倍食べる)。

ビジネスとしての実践

仁 : 惻隱の心に従い、(有料ながら)お客様を助け、役に立ち、社会に貢献するビジネス。

義 : 羞惡の心に従い、不義不正をしない・されないビジネス。(会社を守るセキュリティ意識)

礼 : 辞讓の心に従い、人間関係を大切にするビジネス。(顧客、社員、取引先など、全ステークホルダー)

智 : 是非の心に従い、知識と技能を高め、知恵を尽くす。(AIも取り入れる)

儉約 : 正当な商売で利益を得て、一円の金銭も大切にすして積み重ね、富み栄える。

これを社会のために活用する。(富の主は天下の人々)

個人としての実践

仁 : 家族、兄弟、親戚を助け、社会に貢献できる生き方をする。そのためにお金を使う。

義 : 良心に反する行為をせず、同時に社会悪に対して、できる範囲で対応する。

礼 : 家族、兄弟、親戚、縁者(社員、地域の人々など)との人間関係を大切にする。

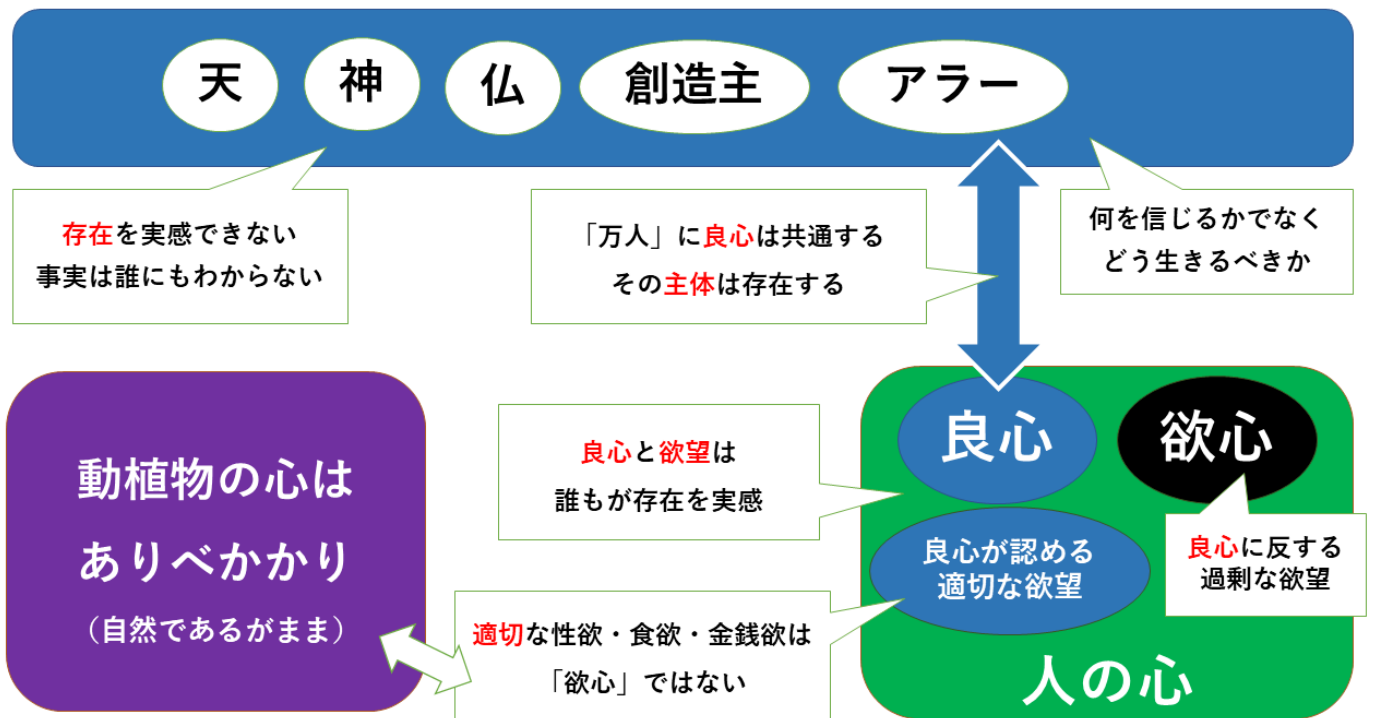
智 : 仁義礼を正しく実行するため、学び続ける。

儉約 : 物や金銭を大切に使い、才能・時間・余裕資金を「世のため、人のため」に使う。

社会に課題は無限に存在しています。

どの課題を自分は担当すべきか。「天命・天啓」として心に響くときが来るはず。

良心と欲心の関連図 (善と悪)



- 全ての人に良心は存在しています。ならば、その「主体」もまた存在するのかもしれませんが。その主体を、儒教では天と呼び、神道では神と呼び、仏教では仏と呼び、キリスト教では創造主と呼び、イスラム教ではアラーと呼んできました。
- いずれが正しいのでしょうか。その存在を実感・証明できない以上、事実は誰にもわかりません。だからこそ、何を信じるのかではなく、「どう生きるべきか」が重要と考えます。
- 人間には良心がある一方で、「欲望」が存在しています。
 - 欲望は、良心を基準として、以下の2つに分けることができます。
 - ◇ 良心が認める適切な欲望 (善)
 - ◇ 良心に反する過剰な欲望 (悪)
- 梅岩は、良心に反する過剰な欲望を「欲心」または「私欲」と呼びました。
 - 「色心は愛より来ると言えども、過ぐればたちまち不仁となる」(過剰な性欲)
 - 「己相応より、よろしく思われたき心あるは皆、名聞なり」(過剰な名誉欲)
 - 「利欲というは道なくして金銀財宝を増やすこと」(過剰な金銭欲)
- 動植物の心は「自然であるがまま」。何をしても「悪」にはならないのです。

梅岩の名言

商人道

- まことの商人は、先も立ち、我も立つことを思うなり
 - ・ 近江商人の「三方佳し」は、後世の人が作ったもの。
 - ・ 「売り手よし、買い手よし」ではなく、まず「先が立つこと」。
 - ・ 先（得意先や取引先）と同時に、我も立つこと（WinWin）。

- 商人で道を知らない者は、貪ることだけを勉めて家を滅ぼす
 - ・ 「道」とは、正しい生き方、正しい在り方。
 - ・ 金銭のみ、儲けることのみを目的としたビジネスは滅びる。

- 商人は勘定くわしくして、一銭軽しと云うべきに非ず
 - ・ 数値による管理は、ビジネスの基本中の基本。金銭に限らず、数値を管理すべし。
 - ・ 倒産者の共通点の1つは「数字に弱い」（野口誠一・八起会会長）。
 - ・ （経営者は）数字に弱いですむものではない（一倉定）。

- 物を売ることによって利を得るのは、商人の道である
 - ・ 貪るだけでは家を滅ぼすが、利を得ないのことも道に反する。
 - ・ 「我も立つ」には、必ず利益が必要である。
 - ・ 企業の永続的な発展と、社員の給与のためにも、利益が必要。

- 直（すぐ）に利を取るは商人の正直なり
 - ・ いくらの利益ならば適正か。
 - ・ 売買双方が納得した値段なら、正しい。
 - ・ 利益を含んだ値を明確に提示し、納得するならばそれでよい。
 - ・ 「直」に、値打（ねうち）や値（あたい）の意味もある。

- 商人は正直に思はれ打ち解けたるは、互に善者（よきもの）と知るべし
 - ・ 商人が買い手に正直ならば、互いに「善き者」となり、両者は打ち解けてゆく。
 - ・ 正直が、信用・信頼を生む。

- まことに子孫を愛せば、道を学びて栄えることを致すべし。
 - ・ 人が道（正しい生き方）を実践すれば、子孫は繁栄する。
 - ・ 道に違う生き方ならば、子孫は滅ぶ。
 - ・ 己一人の損得ではなく、子孫のことも遠慮し、道に生きるべき。

■ 商人の買利は士の禄に同じ、買利なくば士の禄無して事うるが如し

- ・ 江戸時代、卑下された商人。「利益は他人を騙して得たもの」と言われた。
- ・ 梅岩は「武士の給与と同じ」と正当性を訴えた。

■ これ（利益）をかさねて富をなすは商人の道なり

- ・ 商人の道は、利益を得て終わりではない。
- ・ 勘定を詳しくし、儉約し貯蓄を積み重ねて、富にすることである。
- ・ 富がなければ、「まさか」に備えることができない。
- ・ 当時、士農工は「勘定せず、儉約せず、貯蓄せず」が多かった。

■ 富の主は、天下の人々なり

- ・ 儉約貯蓄を重ねて、積みあがった富は、己一人のものでない。
- ・ 富の真の主は、「天下の人々」である。
- ・ だからこそ、自分勝手な浪費はしない。
- ・ 富をビジネスに再投資して、さらに天下の人々に貢献する。

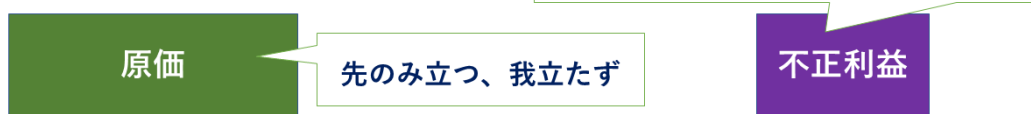
■ 二重の利を取り、甘き毒を喰ひ自死するやうなこと多かるべし

- ・ 「二重の利」とは、不正によって得た利益である。
- ・ 不正な利益は「甘き毒」であって、自らを滅ぼしかねない。
- ・ 下請や仕入先に無理を言い、利益を奪うことは甘き毒。信用を失い、自死することになりかねない。

① 物を売ること利を得るのは、商人の道である



② 利を得ないのは、商人の道に非ず



③ 二重の利を取り、甘き毒を喰ひ、自死するやうなこと多かるべし



正直

■ 神の御教えは、ただ正直をもって善とす

- ・ 正直は神道でもっとも重要な教え。
- ・ 「浄明正直」(じょうみょうせいちよく)とも。
- ・ 「神道において人は本来、**浄明正直**な神様の御心のまま清らかな心を持つと考えます。」(東京都神社庁)

■ 惻隠の心、発する所を直ちに行うを正直という

- ・ 「惻隠の心」とは、人間が生まれながらに持つ良心の作用の1つ。
- ・ 井戸に落ちそうな幼子がいれば、悪人でもこれを救う。
- ・ 「惻隠の心、発する所」とは、すなわち「良心」である。

■ ありべかかりにするは正直なる所なり

- ・ 「ありべかかり」とは、あるがまま、自然のまま。
- ・ 正直こそ、人間のあるべき自然な姿。難しいことではない。
- ・ 「過剰な欲望」を抱かず、自然に必要なもので生きてゆくこと。

■ この正直行わるれば、世間一同に和合し、四海の中 皆兄弟の如し

- ・ 良心に正直に生きる。これを皆が行えば、世界は兄弟のように和合する。

儉約

■ 儉約を言うは他の儀にあらず、生まれながらの正直に還したき為なり

- ・ 儉約する目的は、「正直に還る」ためである。
- ・ 人はそもそも性善であり、生まれながらの正直である。
- ・ 儉約の実践なしに、本来の正直に還ることができない。

■ 我言う所は正直より為す儉約なれば人を助くるに至る。

- ・ 真の儉約とは、正直を本としてなされる。
- ・ 儉約の目的は、「人を助けること」。
- ・ 人を助けるためにも、金銭は必要である。

■ 世界のために、三つ必要なものを二つで済ませるようにすることを儉約という

- ・ 儉約の目的は、「世界のため」。
- ・ 儉約の方法として、3つ必要なものを2つで済ませるコスト削減の知恵が必要。

■ 自分のために物惜しみするのは欲心であって儉約ではない。儉約とは天下のためにするもの。

- ・ 自分のためだけに、金銭や物品を惜しむことは「欲心」からはじまるケチでしかない。
- ・ 儉約の目的は、「天下のため」。

■ 儉約は財宝を程よく使い、我分限に応じ、過不及なく（使うこと）

- ・ 真の儉約とは、自分の分限（財産の状況）に応じて、適切に使用すること。

■ 予言う儉約は ただ衣服・財器のことにのみならず、全て私曲なく、心を正しうする様に教えなき志なり

- ・ 真の儉約とは、物品や金銭を節約することではない。
- ・ 儉約の目的は、私曲（自分の利益だけを考える不正な行為）なく、心を正しくするためのもの。
- ・ 心を正しくするとは、「正直になる」こと。

欲心

■ 色心は愛より来ると言えども、過ぐればたちまち不仁となる

- ・ 性欲・色欲は、元々愛から来るのだから、本来は良きもの。
- ・ 夫婦仲睦まじく交わるのは良いが、相手を違えれば不倫となる。
- ・ 若い時は、見た目や姿だけに捉われて、色欲を振り回す。
- ・ 老いてからは女房を相手にせず、腰元や下女に手を掛ける。

■ 己相応より、よろしく思われたき心あるは皆、名聞なり

- ・ 身分に相応した名聞（名誉欲）であるならば、それでよい。
- ・ 分相応でない、過剰な名誉欲は正しいことではない。
- ・ 善いこととしても、動機が他人から褒められることなら、偽善である。

■ 利欲というは道なくして金銀財宝を増やすこと

- ・ 利欲（金銭欲）もあって悪いわけではない。
- ・ 正当な手段で、金銭を手に入れるのは悪いことではない。
- ・ 問題は、不当な手段で手に入れることである。

■ そのほか万事不義無道を為し心を煩わすは皆、放心を以てなり

- ・ 仁と同じく「義」もまた良心の作用。
- ・ 悪を恥じ憎み、正義を行う「義」は、良心の呵責も引き起こす。
- ・ ここでいう「放心」とは、良心を失うこと、良心から離れること。

■ 正直を守らんと思わば、まず名聞利欲を離るべし

- ・ 正直に生きようとするならば、「過剰な」名誉欲、性欲、金銭欲から離れなければならない。
- ・ 適切で正しい範囲ならば、「私欲」ではない。